

「セイナヨキ応用科学大学-東京医科歯科大学 遠隔国際交流プログラム
SeAMK-TMDU Virtual International Exchange Program」を開催しました

2020年9月8日、日本時間14時00分より、2000年に協定により交流を開始し、その後2016年の3月に部局間協定を更新し締結してから現在まで継続的に交流のあるセイナヨキ応用科学大学（SeAMK）の看護師・保健師学生グループと本学看護学専攻学生グループにより、「SeAMK-TMDU Virtual International Exchange Program」を開催しました。

SeAMKと本校は、2008年より学生の海外派遣による交流を本格的に開始して以来、毎年交流を行ってきました。しかしながら、この度のCOVID-19感染拡大により、残念ながら留学をはじめとする海外渡航が出来ない中で、今回のプログラムは渡航に代わる新たな国際交流の取組として企画されました。

まずは大久保研究科長の「Welcome to TMDU」のオープニングのプレゼンテーションでは、Google Mapを使用して、正に“Virtual”での本校までの道のり（途中、研究科長の行きつけのお店の紹介あり）を紹介して頂き、リラックスした雰囲気の中スタートしました。

前半は、SeAMKの今年来日予定だった学生による「フィンランドの保健医療、セイナヨキ応用科学大学の紹介」、本校学生による「日本の保健医療、文化と本学における看護学専攻学生生活の紹介」が続きました。お互いの国の文化、大学、学生生活、医療や看護システムの違いについて同世代の視点からの意見を聞くことができたという事は貴重な機会になりました。

後半は、2グループに分かれ、ワークショップセッション「The role of nursing in the COVID-19 pandemic」を行い、双方の国の違いは何なのか、今、自分たちに何かできるのかについて話し合いました。少人数での積極的な意見交換となり、30分があっという間に過ぎてしまいました。

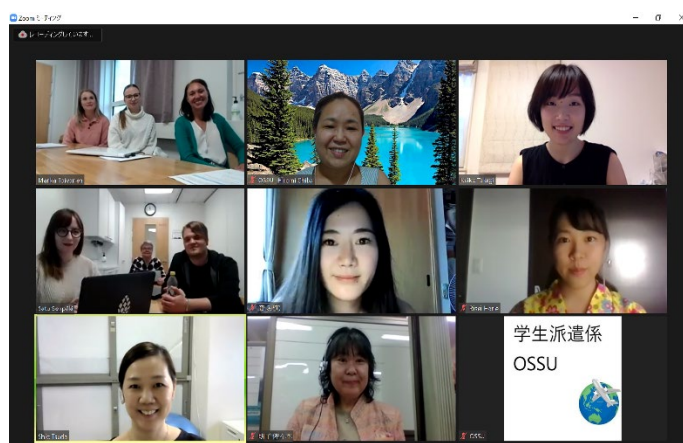
最後に佐々木明子教授が、「この困難な時期の看護の役割について考える今日のプログラムが私たち全員にとって非常に価値があり、充実した経験となることを期待しています。来年も継続していきたいと思います。」と強く双方の学生達に伝えました。

今回は、現地時間の早朝（朝8時開始）にもかかわらず、SeAMK側からは4名、本校からは3名の参加がありました。告知期間が短かったこともあり少数ではありましたが、アットホームな雰囲気の中、その分必然的に発言機会も増え、積極的に発言がありました。

まだネガティブな話題の多いコロナ禍の中ではありますが、このようなイベントが成功できたことは、どんな状況でもその状況に適した新しい形を自分たちで見つけ出して進んでいく、これからの国際交流における希望となる貴重な体験となりました。



プログラムの様子（ワークショップセッション）



セッションの記念写真